

地域を建設する人間育成のあり方を探る その1

富山県は茨城県水海道市とならぶ矢口^{はじめ}新の教育研究実践活動のフィールドである。矢口は様々な教育活動を行ったが、地域再生が問題になっている今、富山県の①総合教育計画の策定(第1次～4次)に対する指導 ②滑川市北加積小学校における地域の課題分析からのカリキュラム作りの指導(何れも昭和25～40年ごろ)という2つの活動に、地域を建設する人間の育成を考える上で重要な、社会状況と教育の組み立てのあり方という面における視点が内在していると考え、調査研究を開始した。

昨年(2008)来、矢口が残した資料を中心に分析を進めてきたが、北加積小学校に多くの実践資料が残されていることがわかったので、4/30、5/1の2日間同校を訪問、②の内容調査を行った。これはその概要報告である。(①に関しても関係者への聞き取り調査等を始めている。方向が見えてきた段階で報告したい。)

北加積小学校 —地域社会の課題分析からのカリキュラムづくり—

JR北陸本線滑川(なめりかわ)駅より南(北アルプス側)に向かって車で10分ほど行ったところに北加積小学校はある。矢口新は昭和25年(1950)からこの学校を指導し始めたが、当時の北加積地域は、児童の家庭の80%以上が米作り農家で、荷車も通らぬほどの細いあぜ道で小さく区切られた耕地からなり、機械化の進んでいない生産性の低い農村だったという。

昭和23年新しく赴任した荒館実校長は、始業式で栄養失調の子どもがばたばたと倒れるのを見て、地域改善のための教育の必要性を強く感じたという。荒館校長は、昭和25年国立教育研究所に3ヶ月間内地留学した後、すぐさま指導を受けた矢口新(当時内容室長)を招いて、本格的に地域改善の教育カリキュラム作りをスタートさせたのである。

教師が「社会を見る目」を持たねばならない

地域改善の教育カリキュラム作りの中核は、戦前の「歴史、地理、修身」に代わる新しい教科「社会科」の内容と学習活動の設計。そのスタートは、地域社会の課題分析からであった。社会科の目標は「現実の社会を分析し課題をとらえ、その解決を実現するための行動力を育てることにある。そのためには教師自身が社会を分析し課題をとらえる目を持たねばならない。そうでなければ真に子どもにその力を身につけさせることはできない」というのが、矢口の考えであったからである。

教師たちは放課後、課題分析のための調査票を持って農家を回るところから始まり、その結果を整理分析、そこから各自での単元設計学習指導案作成、そして毎週の校内研修会で意見を交換し合った。その活動振り

北加積小学校の資料群



北加積小の元教員の方々へのインタビュー



は、地域の人々から「明るいうちには帰れない。北加積は提灯学校だ」と揶揄されるほどであったという。外部からの指導者を招いての研究授業も頻繁に行われている。矢口は昭和32年までの8年間で約30回訪れたと、その著書「社会科教材研究」（法政大学出版局 S32 発行）の中で書いている。

「育てるべき人間像」について論じ合う教師たち

膨大な資料の解析は緒についたばかりで、まだ何冊かの報告書といくつかの指導案を読んだに過ぎない段階であるが、何よりも強く感じるのは、教師たちの教育に対する強い思いである。

次に挙げた「私どもの考える人間像」は、北加積小学校の教員13人が、自分たちの研究をまとめた報告書の冒頭の文章である。荒館実校長が書かれたものと思われるこの文章には、どのような目標を描いて研究を進めていったか、教師たちの思いがあふれている。

私どもの考える人間像

子どもは教育の内容方法を如何なるものとするかについて毎日毎日、苦闘のうちにも楽しみを味わいながら研究を積み加えている。そして、教育の内容や方法について深く突き込んで話し合っているとき、一体お互いはどんな人間を育て上げようとしているのかを反省しあうのである。そして内容方法の是非を決定する基本的なものとして私どもの描く人間像を論じ合うことが多い。

子どもが描いている人間は「新たな生活の建設者」として想定している。（中略）建設者として理想を現実化し具体化するために、あらゆる障害を破砕し、困難を突破し、そのために身を挺する実践的行動を持つ人間を描くのである。建設に働く実践者に必要なものは、豊かな知力であり技能である。

そこで断っておきたいのは、実践に働く知力は、単に過去に累積された抽象的知識をそれとして所有することによって成り立つのではなく、現場の課題に当面して、現場で合理性を働かし、複雑な現実を整理し秩序づけ、これを処理する方法を発見しうるような知力としての知識でなくてはならぬと考えている。

（中略）技能というのは、知識を地盤としてこれを実現にまでもたすことのできる世界構成の科学的手段をさすので、現実構成の技能によって実践者は課題を解決してこれを現実に具体化するのである。

このような豊かな知識技能を、あらゆる生活の具体の場面において、常にいきいきと働かし、新たな生活を推進していくことができるのが、実践的性格をもった人間といえよう。このような性格の人間は、生活態度においてすぐれて実践的行動的でなくてはならぬ。生活の場面において、その生活内容を建設の課題においてとらえるような積極的な態度がなくてはならぬ。

以上のことを要約すれば、私どもの目標としている人間は、現実に与えられた我々の生活を、常に実践的課題によってとらえ、その豊かな知性によってこれを合理的に考察し、これを発展的に処理し理想を発見し現実化し、新たな世界を構成するような人間が育成されて、はじめて新たな民主的日本の建設も可能となると考えるのである。

『教育課程構成の科学的方法の研究』1952、富山県教育研究所発行 より

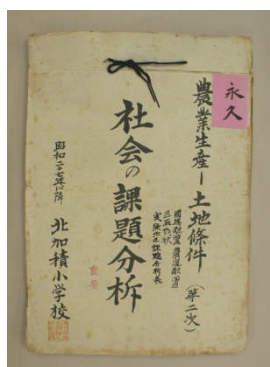
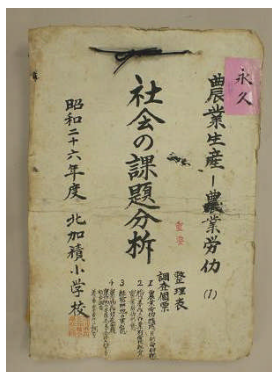
育てるべき能力は、単なる知識ではなく具体的な行動力でなくてはならない。現実の場面を分析・整理し、解決のための行動を生み出す力を育てなければならぬと、ひたすら子どもたちをどう育てるかについて、考え合っている教師たちの様子が伝わってくる。

いま、学校にこうした風景を見ることは少なくなった。聞こえてくるのは、学力低下対策の悩み、親たちの理不尽な要求に対する苦しみ、役所からの調査を含めた膨大な事務量で指導の工夫をする時間が取れない

ことへの嘆きである。このような状態を打開し、新しい時代を建設する子どもたちの教育を、教師が考え合い工夫し合って実践していけるようにするには、どうしたらよいのか。

現在北加積小よりダンボール3箱分の資料(全資料の半分ほど)を借用、東京に帰って複製を作成、資料の分析を開始したところであるが、具体的にこうした研究実践が成り立った背景や、課題分析からのカリキュラム設計の方法論、行動形成を旨とした学習活動設計の考え方の普遍性を探っていきたいと考えている。

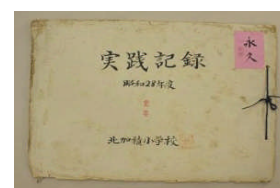
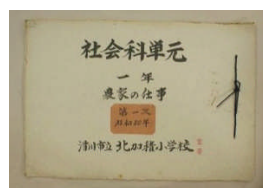
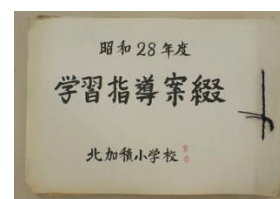
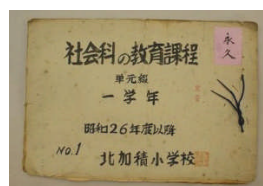
地域の課題分析を行うために行った
実態調査の記録



実態調査の結果から地域の課題を分析したもの
(教材としても利用された)



分析の結果から設計した単元や指導案など



《追記1：その後のインタビュー調査について》

上記報告は7月の段階で執筆したものである。その後、8月5日に、この課題分析からのカリキュラムづくりに携わっていた2名の方に聞き取り調査を行い、研究の進め方や研究から得られたもの、研究を成り立たせた背景、行動形成の考え方など、現在の教育の課題を解決するための視点が見えてきたので、次号でご報告したいと思う。

《追記2》

北加積小への指導と同時期に矢口が指導を展開した茨城県の水海道小学校の研究実践(73, 76号で報告)、ここでは子どもたちの自治活動がいきいきと展開されたことが明らかになっているが、学習について

もたくさんの単元が設計され、指導案や教材が作られている。2校のカリキュラムのどこが同じで、どこが違うか、それを比較することで地域の状況と学習の組み立てのあり方が見えてくると思われる。平行して調査研究を進めていきたいと考えている。

《追記3》

この研究は、横浜国立大学准教授金馬国晴氏、立教大学大学院博士課程越川求氏と共同で調査研究を進めており、両氏は今回の調査にも参加している。教科内容や学習活動、教員の力量形成の点からも学ぶべきものが多いと、両氏とも大きな関心を寄せている。

(調査班：小澤秀子，米島秀次，榊正昭，越川求，金馬国晴，矢口みどり)

JADEC ニュース 78 号 (2009/9) より